

文庫
5885

横濱新報

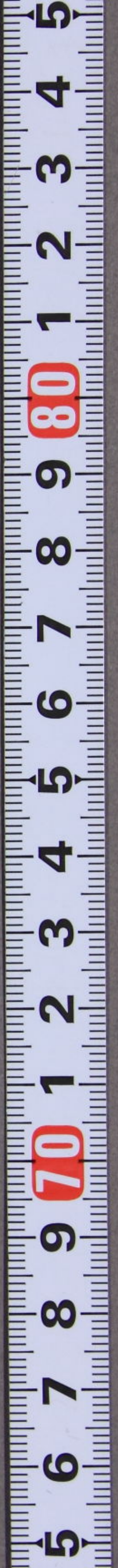
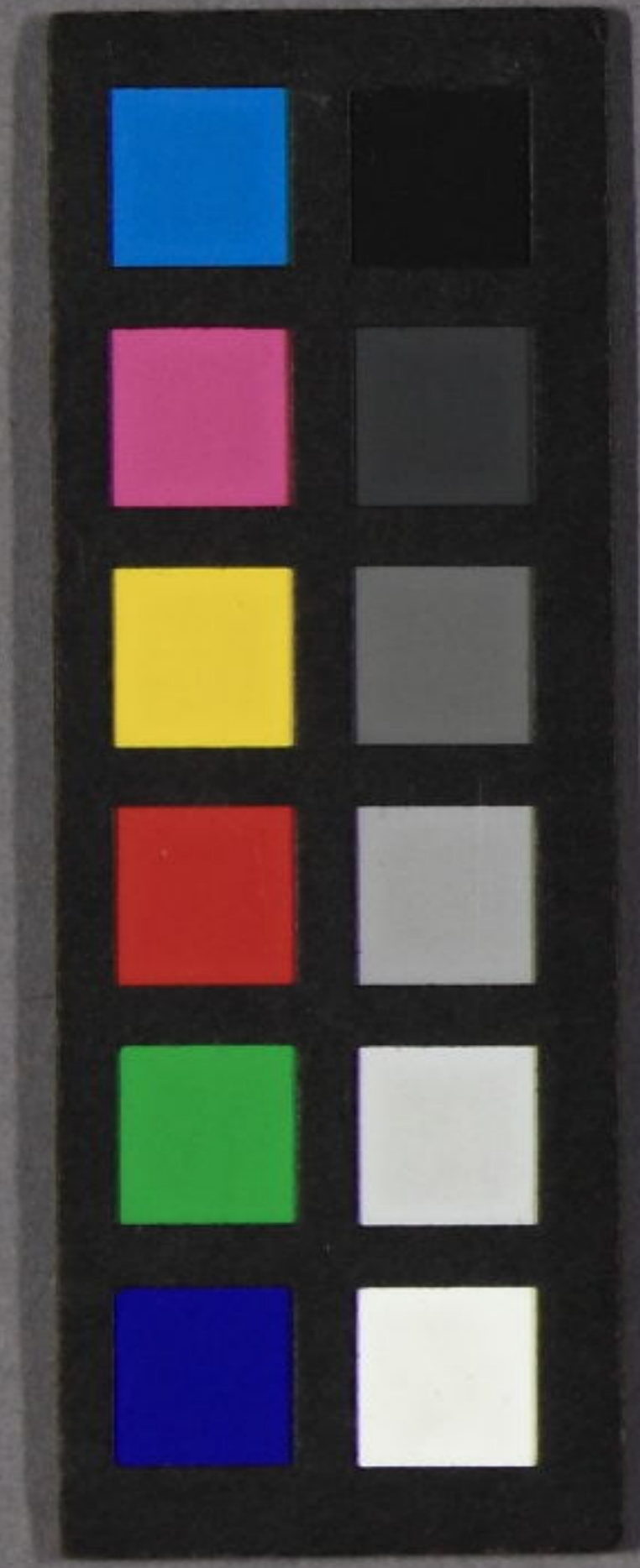
めいほう

第四編

九十三番

ウエンリート

定價壹匁



特 文庫10
2387
4

新報

ウツ・ニート

六十三番

第四卷

おのゝ

MOZAR

宝賢堂

横濱
新報

新報
朝五時

もー月ごき第4

慶應四年戊辰閏四月廿一日

○滑耀先生日記のつぎ

朝五時ごろより會津兵と稱し、百五十人を以り
結城へ打入り、鍊砲をうちけり、官軍を以り、
今敷せり出、たゞひに會津兵あり、以り
敗走し、れば官軍勢に乗じて竹井村といふ處まで
追寄せ、伏し勢四方よりおろり、立ち、鎗鋒を
そらくて突く、おろり、官軍あり、狼狽し、
やく一方をまうめけて、縮川をわたり、開本といふ

處まぶあげのびてちりくぐふありたる士卒を
まとのあむらうくひれをほぎいつるに陸軍隊の兵
あつのにあしをて一齊に銃砲をうちあられが
官軍ひとたまりもあまらば敗走し歡喜院まぶ
ふ名主七九郎が宅其外民家火をうけてその
ひまに船主といふ處まぶあちのびーがあつり江
戸脱走の兵もあつるまで又く絹川をさる久保田
村火をうけ其まぶあ結城を通りぬき夜乃
五時をたふ小山の驛あつりてやどりたる

○十四日、栗橋を收軍したる官軍の手負丸

人せけふ真壁の陣屋へまぶびたるぞ

十七日

きのふ打ちあつきたる井伊藤堂の兵あちち
より小山へあつりたる處に朝四時ごろ一帯の關
東勢驛外まぶあしよせを時の聲をうたふ
とつてけし官兵も銃砲をうちあけを
たつひけるが官軍は且たつひ且退きまぶ
驛の東の麥畑の中まぶ追のけゆれて一時むら
ほどもけつたつひつりあつるころに壬生より
加勢の出しまぶ官軍是ふ力を得てまぶ

母中目

二

に八時過とあがしにあり東照宮の旗をおし立
 て關東勢あびさしくあしきりければ官軍大ふ
 敗走し木沢の人家へ火をうつりてとまされぬ
 本城さして逃あつりるるも壬生勢ハ先手の大
 將と打ころさきさきひとさへもさへばあちぬける
 が石橋驛にぞまるとり宇都宮まであちのびぬ
 もり倒あしたる手負死人其数ちるるべうりば叔
 關東方ハ夜五時むりに小山の宿へ引あしし
 分捕したる品くを點檢しるるに錦の旗一流井伊家
 紋の旗二流木砲十四挺小筒七挺鎗十七本馬四疋

白米二百俵金四千五百兩生捕七人關東勢討死
 五十六人その内あしらむあしりあしりの二人を葬り
 手負を今抱あししそそく支度さめひ
 けしはあしり夜の内ハ宇都宮へ押寄り残
 兵どもをあしあしさんそそく先さたふれをせり
 けるが九ツ時とあししにころ關東勢のころに
 小山を引あししへ太平山へそのほりる
 ○今日東照宮の祭禮あししをそそく徳川家
 甲臣ども昨日生捕たる井伊家の兵の首を切り
 て日光山へ持行き神前にそそくるることを

○今日仙臺なるびに薩長の兵と會津を打
こく土湯越とのみ處まき出向りに會津より
防の兵を出し嶮岨の間にたこひるが仙
臺勢敗走めより風聞あり

十八日

きのみ討死ある官兵の死骸石橋と小山の間に
よこせりて算木をまたあしりたるが如くたの
ごもたきとりあつるものもたけしめさす
にのきあつる風聞あり叔官軍守都
宮ふりまりるよりをきく諸方は集り居

たる關東勢かひそくに襲撃の用意をそな
へりある

十九日

大平山小籠り居たる彰義隊貫義隊大久保
黨會津勢等其外諸家の脱走人都合三千七百
余人早朝より宇都宮城をとりかき攻りたるが
をめぐりたたこひあもなごりし鎮守明
神の社こく少く小高死所ありなれ彰義隊
の兵ども大砲数挺を其上に引あけて無二無三
打立り巴城の内外一圓ふ火焰となり官

廿一日

日

軍大敗走一々が城主戸田某も討死一々
もりのひ又關東方へ降參走一々もりのひ

二十日

昨日ゆふこゝろに宇都宮落城一たりは是を關
東勢四千餘人夜の中に城へ入りあそりて東照宮
の旗日の丸の旗數十流あしたてく今や敵乃
寄せくるのと待居ありあそりに官軍ハ大半南
をさし一々落行はるとさきてさうぢこまよひ
一生一物一々せ其罪をたがすべしとて城にを
守の兵をのこし一物九時むらりに三千餘人を

くりおし一たり

○きよのふ生捕たる土州の參謀なぐびに彦根
千生の陣代の首をまりて獄門ふのちたりけり
三百年未徳川家の恩澤を蒙りたごが敵對
いしし者につれ梟首ふ物とるふのあり

○廿一日よりきよのふ第五篇にかへ引はき出板

○ 雜報

○八王子よりきこぬるころはめはあしに驛きのちう
むるの榜し示しに 天朝御領 汗川太郎左衛門支配所と
かひはあてたてしけしを彰義隊の者ぞとあし
たあしきけり

○十三四日のころ彰義隊のめの三百六十人をり八王
子へのりころ驛の東西の口に關せをすゑく西國武士
とあしききものをえればあしきりたしきしきりび
よりかきをきりてあしきりたしきりたしきりたしきり
しきりたしきりたしきりたしきりたしきり

○八王子の下人同心も日光山の番ふに毎年ま五十人
はく六月朔日ふいりころあしになる例れいあり此月こ初の頃
日光山を官軍にめりころあし五十人のもあしきり
八王子へのりあしきりあしきり

○あつ十七日ふあしきりあしきりの官人きりて下人の
モニテ早ひとりハバセレーとて江戸家のあしきりあし
あしきりあしきりあしきり

○横濱の集會所あといふのものと江戸家のころ好高え
好吏となれあしきりあしきりあしきりあしきりあし
なる所ありあしきりあしきりあしきりあしきりあし
なる所ありあしきりあしきりあしきりあしきりあし
昨日其好魁

たる石炭屋多右衛門茶屋勘助芝屋祐次郎等と擗
捕て裁判所の獄にとめらるるを以てこれまで
日本の商人の情んとすの如きを以てたるゆゆあま
ゆゑに商法を考へてみざるに私法をたてし中
間或のあぶなとと稱し、ゆゑを以てせまくなるやうに心を
めらるるありとこれいおの違ふなりゆゑ利を志めんとの好より起
るゆゑをはるるごとおほやあなるぬりありさのいひぬ
王政御一新の時かゆひてかふる清習とのぞれ知ひまざるの
おほふふふは繁榮の基なるべしと西洋の人とよるい
ひなり

西垣文庫

特

文庫 10

7387

4